貨幣における包摂と排除

Monetary Inclusion and Exclusion

コルネリア・ボーン (森川剛光 訳)

Cornelia BOHN (translated by Takemitsu MORIKAWA)

This paper explores the relationship between the money medium and the analysis of mechanisms of inclusion and exclusion. Such mechanisms currently follow a logic of plural or multiple inclusion as opposed to assimilation. In a full-grown monetary economy, money and property have emerged as regulative structures for the participation in economic practice. Discussing the approach of Luhmann, a distinction is drawn between center, semi-periphery, and periphery of the economic system. While the money medium includes the general population into the periphery of the economy through consumption, this contribution can show that the inclusionary mechanism of the center is creditworthiness. It can be demonstrated that in its historical formation the form of credit is organized in a twofold fashion itself: to make profit and to promote social inclusion. Microcredits are analyzed as a global form of inclusion into the center that does not bear on the distinction poor/wealthy.

1. 新経済社会学

過去数十年の間に、経済社会学は、社会学研究の先端分野の一つへと発展した。この活気は、所有権と生産の新しいレジームと世界的な金融市場の発展のような、グローバルな規模での、高度に可視的な経済的發展が引き金になったのかも知れない [Boltanski & Chiapello 2007; Windolf 2005]。しかし、そのような研究の急増も、新しい理論、概念、および方法の導入と検証の結果であることも間違いはない。米国で発生した新経済社会学は、文化と構造の間の分析的な区別に、新たな混乱を生じさせている。一方で、埋め込み (embeddedness) という主要な概念をもつネットワーク理論と情報理論に示唆され、出発点として構造分析をとる。他方で、経済現象の社会的構築と文化的形成を強調する文化社会学由来の概念を採用している。文化社会学の側では、文化が構造とその合理性の境界を定めるという根拠により、構造とは、文化的、認知的、制度的、そしてシステム理論の見解を追加すれば、システムの埋め込まれているという議論が活発になっている。これらのすべての側面は、今や構造分析において説明される。奇妙なことに経済のメディアである貨幣は市場、観察の相互関係による価格形成、職業への^{アクセス}接近、キャリア形成と情報のフロー形成、手短に言えば包摂現象の構造的、ネットワーク理論的分析において見落とされるのがほとんどである。しかし、文化的な視点からの貨幣の社会的使用についての包括的研究は、Viviana Zelizer が提供している。ここで「特殊貨幣」と「多元的貨幣」という概念は、貨幣が中立的な実体でないことを示している。むしろ、それは雑多な文化的に形成された形態で現象するのである [Zelizer 1993, 1997; Swedberg 2004; Granovetter 1974, 1983; White 1981; Beckert 2006]。

ほぼ同時に、知識社会学的で実証的に志向した金融の社会学の分野が発達したが、それはグローバルな金融市場と金融組織を、パフォーマンス、説明責任、計算のような概念で研究している。これらミクロ社会学的研究は、経済それ自体がいかに「その場で」

構成されるかを示そうとしている。これらの研究は、経済実践を強調し、その現実化のコンテキストを調べるモデルや方法を探っている。Zelizerが貨幣を、その様々な使用の形態において分析する一方、貨幣は——新古典派経済学以前に採用された「商品」という術語で——金融社会学による金融市場の調査では、任意の財となる。けれども、経済システムの構築と自動化ということになると、貨幣メディアとその意義の独自性を見失うという代償を払うことになる。金融市場における経済的慣行（実践）のこのような分析のメディア的側面は、オンライン・コミュニケーションのための、ブローカーの間での個人的相互行為の意義がますます重要性を失うということと、株式市場でブローカーが物理的に不在となることに焦点を当てる。彼らは、モデルの重要性、理論における表象、実践において恒常的に再生産されねばならない意味の経済的地平生成のためのスクリプトと数値の表記を議論する。行動科学的、状況的、かつ「行為者の」知識に基づいたコンテキスト内でのパフォーマンスが、ネットワーク理論の構造分析に對置される⁽¹⁾。

以上の研究結果は、ここでは論じない。むしろ、これらの研究結果は、以下では前提とした。しかし、今強調した空白——経済システムのメディアとしての貨幣の分析の欠落——は、以下の議論で補填されねばならない。これにより、メディアとしての貨幣は、事象次元や時間次元で経済的な参加のための決定的な要因であるだけでなく、社会的次元でも経済的な参加のための要因であることが証明できよう⁽²⁾。それは、いかに個人が^{パーソナル}人格として包摂されるかを決定する上で特にかかわっている。このことは経済的領域からの排除が、完全に成長した貨幣経済の条件の下でも可能であるかどうか、どのようなしかたで可能になるのかという、問題を提起する。

事象次元での結果は明白である。貨幣を用いたコミュニケーションのゼマンティックと実践は、現代貨幣経済が一般的商品化に向かう傾向を帯びているという仮説を反駁している。貨幣経済の導入は、決して商品化の増大をもたらしたのではなく、むしろ何が購買可能かを新しい形態で限定している。中世ヨーロッパで貨幣は官職、救済、地位、身分、爵位、学位、税収、および政治的影響力といったまったく多様な「所有物」の獲得にかかわっていた。今日、そのような慣行はせいぜい、非合法的なものとして、そしてそれ故、ここで提案された意味での排除の例として観察することができるに過ぎない。どのような対象が、「貴重な（価格のつかない）」⁽³⁾ものとみなされるかは文化的、歴史的に様々である。したがって、文化的ゼマンティック的制限を除けば、貨幣の帝国主義は、事象的次元で宗教、政治、教育、科学、それぞれの帝国「機能システム」の境界で停止している。しかし社会的には、貨幣は普遍的に包摂に向かっている。肌の色、「不名誉な職業」、ジェンダー、年齢、エスニシティ、国籍を理由に、誰かを貨幣の使用や所持から排除することは不可能である。逆に、支払能力と信用力だけでは——この論文が示そうとしているように——貨幣経済への包摂を可能にしても、貧困、高貴な生まれ、また正義の信仰への包摂は保障されない。

この論文で論じるのは、貨幣メディアの意味と機能は経済社会学と金融社会学の最近の研究で見落とされているということである。この論文のテーゼは、貨幣経済活動への包摂は貨幣メディアの使用の探求なくして説明することはできない、というものである。これには貨幣創造のメカニズムも含まれる。他方で、現代経済における排除は包摂的排除として観察できる。つまり、誰も完全に現代の経済システム、世界経済から排除することはできないことを意味する。それゆえ、私は最初にここで用いられる包摂と排除の概念を説明する。第二に、経済上の識見と歴史的な貨幣のゼマンティックにもとづいて描かれた、貨幣

メディアの作動様態の社会学的スケッチを私は提供したい。経済の包摂と排除のもう一つの様態の存在を否定することなく、私は貨幣経済の「作動上の中心事業」である金融に集中するだろう。以下で示されうるように、これは現代経済システムにおける中心・半周辺・周辺の区別を説得力ある形で示すだろう。

2. 経済システムの構造的区分としての包摂と排除

包摂と排除の分析が取って代わるのは、同化と統合の理論である。概略的には、この[理論的]発展は、次のように要約できる。同化の理論は、1960年代末にパーソンズが記述した、包摂のますます増加する多元的秩序により、信憑性を失っていく。メンバーシップの役割の多元化——例えば、教育や科学における——によってのみならず、生まれつきの地位、宗教、肌の色などのような帰属的形質がますます注意を引かなくなり、ステータスの多元的秩序が生じる。このことはまた、同化と包摂に明確な区別を生じさせる。アフリカン・アメリカンは、大統領になりうるし、スイス国民は、ドイツ銀行の最高経営責任者(CEO)になりうる[訳注：前者はもちろんバラク・オバマ米大統領。後者は、ヨーゼフ・アッカーマン前ドイツ銀行CEOのこと。在職2006-2012年]

「多元的な社会構造において、民族的、あるいは宗教的集団への所属は、個々の社会参加のすべてを決定するものではない。職業、教育、雇用元、政治的所属は、程度は様々でも、民族や宗教とは無関係となろう。全体的に、アメリカの発展の傾向は、この意味で多元性を増加させつつあり、従って、全社会的地位の構成要素間の接続はよりルーズになる。この傾向は、我々の目的にとって、ある特定の重要な意味を持っているつまり、包摂と同化の間に明確な区別をすることが不可欠であるということである」[Parsons 1976: 429]。

ルーマンはこの洞察を出発点とするが、パーソンズの仕事にまだ存在する規範的統合の概念は採用しない。ルーマンは、包摂と排除の秩序は、歴史的に変化するし、社会分化の形態がそれらと関連していると想定した。パーソンズは、社会文化的進化为「適応能力」の増大、「分化」^{アダプティヴ・アップグレーディング}、「包摂」と「価値の一般化」として構想した[Parsons 1971: 26]。このあまりに直線的な構想に反対して、ルーマンは、密接に包摂の観念に緊密に結びついた、排除の可能性を強調している。さらに、彼は問題を、分化と包摂／排除の変数の間にある、無指向的関係としていいかえている。それ故、分化の様態は、「全体社会の内部で包摂と排除の差異を反復する規則であり、しかし同時にこの規則は、対象から除外されることなく、人が分化とその包摂のルールに、それ自体から排除されることなく、参加することを前提とする形式である」[Luhmann 1997: 622]。

包摂／排除が全体社会内部の差異ならば、包摂と排除は、全体社会内部で発生する。確かに環節的社会では、排除はまだ「外部」(殺害、追放、接触の断絶)を意味する。けれども作動としては、それは社会内部で生じる。成層社会では、包摂／排除はますます階層、地域、信徒団体、世帯からの排除として、他の社会的領域への包摂を意味し、最悪でも修道院、救貧院、不名誉な職業、あるいは他の指定された地位のような避難所への包摂を意味する。このように、排除は全体社会からの排除を意味しない。排除の明らかに政治的な中世後期および近世の形態ですら、全体社会からの排除を意味するものではない。むしろいくつかの場合では、特別な地位を与える、社会内の調節の設定である。

包摂／排除の差異の社会内的ステータスは、現在の世界社会ではさらに明らかである。全体社会として現在唯一考えられるものは単一であり、孤立した社会的な空間はもはや存

在していない [Luhmann 1982: 132-133; Heintz et al. 2005: 8; Bohn 2009: 46]。このように、もはや社会性の外部の形式は存在しない。世界社会である、現在の機能的に分化した社会では、包摂と排除の問題は、ルーマンの理論 [Luhmann 1995b; Luhmann 1997: 618ff.; passim] によると、構造的に完全に異なる形態をとる。これは、すべての機能への社会のメンバーの^{アクセス}接近を保障する機能分化の論理にもとづいている——それが機能論理自体に反しない限り。成層社会において包摂は遺産と家門のメンバーシップにもとづいている。これは、奴隷や使用人にも当てはまる。ここでは、社会的地位が包摂を特定し、結果的に生活の個々の形態を特定する。けれども、包摂のこの古典的なパターンが分解すると、(一般的な意味で) 個々の^{キャリア}経歴の形態における、偶発的なシーケンスが個人と社会のインターフェイスに根づき始める。専門職キャリア、学術的キャリア、あるいは婚姻関係は、機能的に特定されるオーディエンスの役割の仮定と同様の重要性をもつ。これ以降、社会のサブシステムへの包摂の多元化された形式ないし多元的な形式は、相関する傾向にある。しかし、それらは統合されないし、相互に転換可能でもない。ある人格の一つの社会サブシステムへの包摂は、その他の機能システムに、どのように参加するか、どの程度参加するかをもはや決定しない。これ [このテーゼ] は不平等理論による、あらゆる異議に対して保持可能である。[このことの] 貨幣メディアへの含意は次のとおり。貨幣の所持は、学術称号の所持、正または負の資格、親密さへの^{アクセス}、宗教的实践への参加、また芸術や科学への理解をあらかじめ決定することはないということである⁽⁴⁾。

位階制的に組織されたサブシステムと対照的に、機能的なサブシステムの観点からは、排除への動機も正当性もない。現代では、排除の動機は組織のレベル、状況によっては相互行為のレベルにある。組織が排除を、標準的で正当なシナリオとして採用しながらも、一般的な包摂は、機能分化の自己記述の一要素である。貨幣の使用、市場への^{アクセス}、法的能力、婚姻、教育への^{アクセス}、または信仰の自由から誰かを排除する明確な理由は存在しない。そして、まだ——私の推測だが——内的除外と包摂的排除の形式は、現代のサブシステムの内部で、現代の経済の内部で、このように観察できる。

[人権宣言で] 表明された、すべての機能システムへのすべての人間の包摂を達成するために、多面的なゼマンティックと構造が発達する必要がある。機能的に特定のオーディエンスの出現、平等のゼマンティック、包括的なゼマンティック上の前提条件としてのヒューマニティと人権、そして機能的に特定されたゼマンティックの転写および分化がそれである。経済システムの場合、窮乏のゼマンティックを必要性という、上流階級も含んだ一般的ゼマンティックに転換することを、このような転写は伴っていた。窮乏しているのは低所得者のみだが、豊かで裕福な階級もニーズ (必要性) を有しているというわけだ [Appleby 1976, 1978; Pichler 1983 も参照]。最後に、サブシステムが自律的な仕方では包摂と排除の規制を可能にする、機能的に特有の構造が発達する必要がある。教育システムの場合は全住民のための義務教育、法システムの場合は一般的な法的契約的能力、経済システムの場合は規範的構造としての財産と所得 [がその例である]。

しかし当初は、経済システムの自律化は、政治的局面と家政的局面の観点での区別の増大に従って進行し、財産コードにもとづいていた。有産／無産の区別は、有産者のみが経済、あるいは社会に包摂されることを、有産ブルジョアジーと財産個人主義のリベラルな暫定ゼマンティックがそうしたようには、維持しない。後者は納税を根拠として、有産者のみが公共への責任能力があるとみなす。財産選挙制は、有産者のみに政治的投票権を保障

した⁽⁵⁾。包摂は区別の正の値によって生じる。しかし、財産コードでは更にそれ以上が含まれている。「すべての所有可能な財に関して、誰もが所有者、または非所有者であり、第三の可能性は除外されている」というものである [Luhmann 1988: 89]。財産は、一の所有が、他の所有を排除する限り、常に排他的である。当然のことながら、コモンズ（共有地）の所有権はこの点で例外的なケースである。ここで所有権から除外されるのは、他の共同体である。しかし非所有者は、彼らが他人の具体的な所有権から排除されることを受け入れるという点で経済に包摂されている。非所有者が財産獲得のいかなる可能性からも排除された場合にのみ、完全に彼らは経済から排除されるのである。

経済活動の一次コードは実際の物質的財に関連する財産コードであるし、常にそうであった。労働と自らの身体は、財産として普通に理解されたものの、非常に議論された例外を構成する。これに、経済の貨幣化が二次コード化として続くが、これによって財産の譲渡が、自然法によって課せられた制約から、最初に解放される。今や貨幣化された経済も、労働と不動産の両者を売却可能にし、貨幣メディアに包摂する。現代の財産は、中世ヨーロッパの財産概念とは、貨幣に媒介された、他者への移転可能性という点で異なっている [Pocock 1979]。

二次コード化である「支払い／不支払い」は、出来事に依拠した決定とシステムの高次の「脈動」という、他のシステムと比較して、異例の尺度を確立するのみではない。[この第二のコード化は、経済の] 非物質化増大の前提条件でもある。つまり、それはもはや材料費、準備金と供給、商品の譲渡によっては駆動されない経済領域を生み出す。これは非物質的な権利や財産権の増加と過去30年における金融セクターの急激な増加によって証明されている。金融取引における一見したところ無限の増加と財貨取引とのその不均衡な関係は、いわゆる非物質化を示すものである。「外国為替取引量は1500兆ドル近くに上るが、これは一日の国際貿易総額の70倍以上に達する」⁽⁶⁾。支払いの連鎖は専門知識や特許など非物質的財に限定されない。それは貨幣メディア自体も巻き込み、この反射性は支払い様式と外国為替、裁定取引、デリバティブ、先物などの取引の形式で表現される。貨幣メディアの反射性増大にともない、経済コミュニケーションが実際に物理的に存在する要素に基づくことはなくなり、ますます純粋に保証と期待にもとづくようになる。「諸国民の富」が達成可能で、誰がどのようなしかなでそのような富に関わっているのかという問題は、アダム・スミスが論じたように、「労働」とその組織に依拠して答えることはもはやできない。このように経済における包摂と排除の問題を、財産と、いわゆる実体経済への参加への単純な言及によって解決することはできない。以下では、私はこのスケッチをいくつかの特徴と追加の仮定で捕捉し、更なる議論の基礎としたい。

(1) 交差：包摂の帰結として排除。包摂と排除のための内的及び外的機会

詳細な分析で示されうるように、現在の排除の審級として認識される現象が、実際には包摂の結果であることを、私は前提とする。機能システムが排除の理由を有しない場合でも、これらのシステムが包摂的排除と内的除外の内的メカニズムを有するのは、まさに「人権宣言の形での」一般的包摂の結果とその達成の試みである⁽⁷⁾。包摂と排除の間の差異は、機能システム内部での構造化原理である。投資の失敗、投機上の誤謬、または予期せぬ経済発展に起因する破産は明確な例であるが、排除のほとんど他の形式同様、一定期間後に復元〔再包摂〕可能である⁽⁸⁾。経済的排除は経済の外部を原因としても生じうる。政治的

に動機づけられた搾取は、政治的理由を有するが、単なる経済上の格下げよりもはるかに大きな経済的な帰結を持つ。これは実際に、経済システムの中心と半周辺からの排除へとつながりうる。国民社会主義体制において、ユダヤ人に課せられた国外移住時の金融資産に関する法的制約は、同じ時代の為替管理規制がそうであるように、この例を示している[Stützel 1975: 14]。さらに、法システム内で命令される法的罰金は、経済的には破滅となることがあり、雇用関係、さらには消費全体からの排除につながる可能性がある。逆に、家産相続により生じる「身に余る資産」による経済的包摂は、相続人を政府の移転所得[社会給付]から除外する可能性を有するというのが、[その]経済的帰結でありうる⁽⁹⁾。

(2) 複数のもしくは多元的経済的包摂

全体社会で観察可能な包摂の複数の、多元的秩序も、いくつかのサブシステムでは構造レベルで現れる。市場と標準化された貨幣使用への一般的なアクセス可能性にもとづいて、収入と財産は貨幣化された経済での経済コミュニケーションへの参加を規制する、制度化された様態として現れる。この構造は個人を経済的に人格として包摂しうる、多元的な役割、地位、およびアドレスの様態に対応する。市場参加者、資本や資産所有者、企業家、公務員とおよび賃金労働者、経済団体の職員、投機家、投資家、年金受給者、預金者、セールスマン、商品広告のためのアドレス、支払い決定のための価格観察者、株式保有者、ファンド保有者、通貨ディーラー、インサイダー、債務者と債権者などである。

(3) 経済システムの包摂作動：支払い能力の発生

包摂の多元性増大が、経済システム内部の構造レベルとゼマンティックレベルで観察される一方、作動上のアクセスはシステムの境界を定義する作動にもとづいている。経済システムの作動プロセスへの包摂は、所得や財産にもとづいて、市場構造と貨幣化によって特徴付けられ、必然的に——これが私のテーゼなのだが——貨幣正規の使用を含み、支払い能力の発生を含む。これは、経済システムの中心において前提とされる支払い能力としての信用力を含むということを示したい。

(4) 中心、半周辺、周辺

専門家やオーディエンスという役割による包摂の概念は、経済システムではあまり説得力をもたない。ウェーバーは、宗教の領域での司祭と平信徒の役割に、補完的な包摂概念を説得力あるしかたで精緻化した。しかし、経済システムにおいてオーディエンスと平信徒にあたるのは誰だろうか。生産パラダイムに由来する、生産者と消費者の概念的非対称性は、発達した経済における多元的包摂を適切に扱えない。私の見解では、経済における包摂と排除のダイナミクスのより適切な測定と概念的な構造化は、中心、半周辺、そして周辺を区別することによってなされる。

中心、半周辺、及び周辺の分析は文献中で非常に一貫性のない方法で使用されている。ウォーラーステインは、これらの概念を現代世界システムの考察の文脈で、「資本主義の母国」としてのヨーロッパ諸国と資本主義世界経済の周辺部の地域の間の不平等と権力の関係を分析するために、導入した。彼にとり半周辺は、拡大する世界経済における地政学的な変化の結果として、中央から脱落、周辺として以前の状態からの前進した地域によって構成される。「ミドルエリア」としてこの地域が、中心と周辺の間の均衡において重要な役

割を果たしている。それゆえ、中心と周辺の違いは世界の地域間の権力を賦課されたダイナミックとして、最終的には空間モデルとして構想されている [Wallerstein 1974, 1979]。

Baker [1992] は、差異の構造理論の概念を提案している。彼は、経済システムの中心、周辺、および半周辺での配置に従って、金融アクターを区別する。金融市場の経験的構造の統計分析を手段として、貨幣における決定を制御する手段が、経済の制度的中心として、銀行にほとんど限定されることはない、ということを彼は示すことができる。むしろ、潜在的な債権者として、民間部門は貨幣創造と支払い能力の創出過程にますますかかわるようになる。ペイカーの分析によると、銀行や中央銀行ではなく、民間の「ノンバンク金融機関」が経済内部での意思決定能力と定義の強制という意味で中心を占めるということ、これは含意する。[Baker 1992: 134]⁽¹⁰⁾。ペイカーが主張するように、何が貨幣として通用するか、貨幣は何の価値があるかは、その時々刻々と変化する利用状況によって本質的に決定される。彼によるとこのような使用の規制や制御は、必ずしも中央銀行には見いだせない。中央、半周辺と周辺の区別は、ここでは制度的、構造的なモデルとして提示される。

最後に、ルーマンもまた私達の議論に重要な仕方、この区別を用いている。ウォーラステインと違って、彼は中心／周辺を空間的な意味ではなく、全体社会のサブシステム内部の分化の形態として構想した。半周辺の概念はルーマンの著作には欠けている。歴史的に言えば、サブシステムは常に制度的、主に組織的な中心をめぐって発展してきたという彼の考察から引き出すことができる。これらは、政治システムでは国家機構であり、宗教的な領域では教会であり、科学にとっては大学であり、経済にとっては銀行制度であり、法システムにとっては、そのサブシステムである司法である [Luhmann 2004: 274 ff]⁽¹¹⁾。しかし、法システムの自立化過程の発端から司法制度が存在したのに対し、銀行システムの発生は、経済にとっての同様の過程の終わりをなしている。サブシステムの現在の機能分析において、中心／周辺の区別は、位階制のモデルに取って代わる。このように、ルーマンは、法システムの彼の分析で、契約の締結や立法が周辺を構成するのに対し、いかに司法組織がシステムの中心として、司法妨害の禁止に伴い、確立されるのかを示している。しかし、中心と周辺の関係は権威的な関係ではない。比較可能な構造は、経済システムにも見出される。ここでは、生産、商取引、消費はシステムの周辺または半周辺に属し、銀行システムが中心として出現する。

ウォーラステインとペイカーのいずれも、中心／周辺の差異を包摂と排除の問題と関連付けていない。しかし、この二つを一緒にしてはじめて、私の議論の利益は明らかになる。双方の理論的な観点を統合するために、私は前述の3つのパラダイムにもう一つの局面を追加しなければならない。つまり、ウォーラステインの地理的空間的概念、ペイカーにより提出された権力の潜勢力に準じて位置づけられた制度的アクターの概念、およびルーマンの理論におけるサブシステム内部の分化の一部としての組織的中心の出現である。自律的経済の根本的な進化上の成果としての貨幣メディアという概念と包摂上の基本作動としての支払い能力の創出は、私の考察の基礎として役立つだろう。このようにして、以下の議論は、厳密に、中心／周辺／半周辺の差異を貨幣メディアに関する実践と作動オペレーションに関係づける。

この示唆を前提とすると、貨幣経済の中心への包摂は貨幣創造自体に関わる全ての作動によって実現するということが帰結する。古典派あるいは新古典派経済学と異なり、貨幣は生産と財の取引によって駆動する実体経済を包む、不可視の「中立的ベール」として認識することはもはやできない。完全に成長した経済の駆動力は、もはや家計の需要、あるいは財の

供給ではなく、むしろ金融経済、貨幣メカニズム自体にあると想定できる⁽¹²⁾。様々な理論において貨幣創造のメカニズムは信用メカニズムとして記述される。この点については後で論じる。現代の貨幣経済の中心が生産ではなく、金融システムに見られるのであれば、債権及び債務者の関係は、この中心への基礎的な包摂過程を構成するものとみなすことができる。

生産と商業の圏として記述可能な半周辺への包摂は、支払能力創出様式としての所得と財産によってなされる。半周辺の具体的な実践は、以下のものを含む：予算編成、財務管理、所得稼得の正規形態としての労働への包摂、しかしまた製品の革新を通じた市場シェアのための競争も。商業の特殊な形態としての先物取引、先物契約も半周辺における実践である。その目的は消費や貨幣創造ではなく、商業関係におけるリスク最小化にあるが、暴落が示すようにそのようなリスクの最大化という意図せざる効果を持ちうる。

最後に、現代経済システムの周辺は消費の圏として記述できる。貨幣は取引可能だが、消費することはできない。ここでの目的は住民全体に財とサービスを供給することである。周辺の典型的な実践は、このシステムの外部による基金充填に依拠している⁽¹³⁾。公共支出も経済システムの周辺に属している。これは消費によって経済サイクルへと逆戻りするが、その受給者の半周辺への包摂によっては、獲得されない。財や貨幣に代わる商品券を受給する、国家配給の受給者は、経済の周辺から排除される。このような受給者は、この場合、排除的包摂としても考えられる包摂的排除の意味で排除される。この作動は財の流れの中には包摂されるが、貨幣の流れには包摂されず、貨幣メディアを構成するものから排除されるのである。財に関する選択の自由、市場の種類、支出の時期、および収益性のために支出を控えるという決定等から排除されているというわけだ。

中心は半周辺や周辺無しでは作動できないし、中心無しでは周辺と半周辺は存在できない。したがって、ここで要請されているのはランクや社会的有意性における差異ではない。むしろ異なった領域の作動の循環ネットワークが推定可能である。この点についてはまた後で議論する。経済システムにとり、これが意味することは、中央の貨幣創造、特定の信用貸付が投資や資産購入に役立つことを条件として、半周辺と密接に結びついていることである。同様に、消費の圏における支払い^{パーソン}は、支払能力の創造を前提としている。このように、貨幣メカニズムへの人格の包摂に関して、通常半周辺と周辺への包摂は必然的に中心への包摂から生じることが推論できる一方で、その逆は成立しない。「外部のアリーナ」が、ウォーラーステイン [1974: 350] の理論では、世界経済から排除された領域として考察されねばならないのに対し、貨幣メディアへの段階的排除と包摂は、現代経済における参加と内的締め出しの主要な尺度であると私は主張する。このような段階は「貧困」から「富裕」への尺度に変換できない。決定的な変数は、富と貧困ではない。むしろ、次のように表現することが適切だろう。自分たちの生活を破産のリスクに曝すことができるもののみが、貨幣経済に包摂されている。信用融資に関わるもののみが中心に包摂されている、と。

経済システムの中心の内部における包摂と排除、それゆえ貨幣創造にかかわる実践に以下の考察は焦点を当てる。これは、貨幣メカニズム自体と信用の特定の形式の有意性の徹底的な分析が包摂の理論に必要となる。

3. メディアとしての貨幣. 経済の中心内部における包摂と排除の原理としての信用度

(1) 貨幣メディア

希少性の条件下で不確実性と予測不可能性は、近代の経済実践の基本的な問題と見なす

ことができる。信頼メカニズムは貨幣を用いたコミュニケーションにおける不確実性の問題を埋め合わせる。現代の経済で、これはシステムにおける信頼を意味する。貨幣を受けとることで、私は機能している世界経済を信頼する。つまり、私がこの貨幣を再び支払い手段として、世界のどこにおいても、いかなる目的で、いつでも、どの市場でも、どの通貨でも、用いることができるということを信用するのである。時間的、事象的、社会的自由における収益は、一般的に貨幣メディアによるものと考えられる⁽¹⁴⁾。将来期待の不確実性の意味での予測不可能性の問題は現在を未来と結合する貨幣の機能によって埋め合わせられる。ケインズにとって、貨幣メディアの最も重要な特徴はここにある。彼は既に交換パラダイムを放棄していた。「貨幣の重要性は、本質的に、現在と未来の間の結合であることに由来する」[Keynes 1936: 293]。貨幣にたびたび帰属されてきた古典的な機能は、価値の貯蔵、支払手段、計算単位、および価値尺度である。これらの概念は貨幣メディアの本質的な特徴を見落とすという点で共通している。

貨幣はここでは、象徴的に一般化されたコミュニケーションメディアとして考えなければならない [cf. Luhmann 1988: Chap.7]。これは支払い期待を可能にする制度化された支払い手段として機能する。これは同時にこうした仕方でのみ、社会的状況に構成的な他我と自我の間の差異を架橋できる。これは、他我と自我の両方を統合的な仕方に関係づけている象徴的形式を通してのみ行われる。貨幣シンボルの歴史は、その「本来の性質の変更」[Bloch [1936] 1954] の歴史として、しばしば描かれている。1696年にイングランド銀行による紙幣の分配、ブレトンウッズ会議、および1973年の米国政府による連邦ドルの金兌換停止は、この過程の劇的な出来事と重要な段階として見ることができる。イギリスでは、議会によって制定された鑄貨不足は、支払い形態として最初の紙幣の受け入れを容易にした。しかし、この点でより重要なことは、法案の信用力は英国王室の全体の不特定の税収にもとづいていたという事実だった [Hutter 1993, 1999; Carruthers 1996]。金本位制からの貨幣価値の解離は——もちろん、流通しているすべての貨幣が実際に金に交換された時点などなかったが——貨幣価値が、その後もはや外部標準ではなく、他の通貨との為替関係によって決まることになったという限りで、この発展の最終点をマークしていた。しかし社会学的分析によってカバーされていないのは、貨幣自体の象徴的性格によってますます自然的標準からの乖離が進むということではない。このような自然化された解釈は、金やコヤスガイの評価と選択も社会的慣習そのものに従っているという事実に照らし除外されなければならない。このように、貨幣は正にその端緒から、それが内在的価値と一般化、すなわち多種多様で文化的に決定される用途に役立てられるという意味で、シンボルとして理解されなければならない。貨幣メディアの正確な目的の文化的個性的形成は、法的、経済的譲渡〔転写〕可能性という意味で、代替可能性も社会的普遍性も否定しない。むしろ后者は、正に貨幣メディアが異なった形態をとるという能力の前提条件を構成している。Zelizerの前述の理論はこれに応じて修正しなければならないであろう。そのため、貨幣メディアのシンボル形式が（ブレトンウッズ後の）新しいものではないとしても、自己言及的なものとしてのメディアの（自己）記述は、それ自体への恒常的な言及により動的な安定性を獲得し、これによって新たな性質を受けとる。

貨幣の希少性はその自己安定化の前提条件である。結局、その明白な人為性と単なる象徴的特徴によって、貨幣は任意に鑄造・発行できることになる。したがって、支払手段としての貨幣の制度化は、希少性の制度化を伴う必要がある。しかし、社会に利用可能な希

少性の導出手段はそれ自体稀少である [Hahn 1987]。現代の貨幣メディアの場合、希少性は19世紀のような二層構造の銀行システム（国立中央銀行と民間商業銀行）の制度化によって達成される。このように、貨幣はもはや現金や株式分割の形式に拘束されず、銀行貨幣、小切手（としての貨幣）、通帳（としての貨幣）、[金融] 信用状と他の全ての派生商品を含む。さらにこれは信用のメカニズムと借用証書によって、自己生成している。連続的なマネーフローは、支払いの相互的約束の連鎖としていまや記述可能である。

経済の中心における作動の支配的な様式としての支払い約束を伴う、代替可能な象徴メディアとしての貨幣は、経済の中心への包摂と排除にどのような帰結をもたらすのだろうか。この中心を金融社会学的視点がしているように、貨幣における取引として構想せず、銀行と中央銀行組織としても想定せず、貨幣創造をとまなう全ての作動として捉えるならば、貨幣創造のメカニズムをもっと間近で観察することが必要である。

(2) 包摂と排除のメカニズムとしての信用と信用度からの貨幣創造

貨幣は信用によって創造されるという考えは、経済理論中の様々な変種に見出される。ここでは、私は金融ケインズ主義、^{プロパティ-エコノミクス}資産経済学、およびサミュエルソンによる小切手貨幣の創造定理に従い、この洞察を、経済システムの中心における包摂と排除に適用する。金融ケインズ主義の定義は次のように要約できる。貨幣は信用ではないが、信用によって創造される。交換という行為ではなく、債務関係が貨幣機能の中心にあると議論される [Riese 1998]。この創造論的命題にしたがい、より体系的な概念では、貨幣創造は債権者と債務者との関係にもとづいている。ここでは中央銀行が債権者の位置にあることを想定している。ここまでは信用リスクなしで可能である。金融ケインズ主義によると、貨幣は中央銀行からの信用であり、したがってすべての支払いは、新たな債務者を求める債務証書になる。この概念は、中央銀行の貨幣での支払いを指し示しており、個人と銀行を「人格的 [個人的]」信用能力の恒常的証明という重荷から解放する。しかしそれは包摂理論に関する問題についての情報を我々に与えない。つまり、いかに人格や組織が、彼らが求める新たな債務者の信用を獲得するのかという問題である。^{パーソン}資産経済学は、貨幣発生と貨幣創造の進行過程も財産授与の約束で説明可能であるという考えで、支払能力の創造についての一般的考察も補完する [Heinsohn & Steiger 2006; cf. also Carruthers & Ariovich 2004]。

完全に成長しきった貨幣経済では、貨幣メカニズムに従属する信用メカニズムは二つの形態をとる。決済機能（金融ケインズ主義）に内在する信用という形態と財産と占有の相違に基づいた信用という形態である。後者の形態では、債務者の占有においても、一時的に処分権を放棄する債権者の占有においても、貨幣は二重に目的を果たす。このように貨幣創造は、債務者が使用していても、債権者が権利を有する財産への報奨の結果である。銀行間の資金創出の文脈では、Samuelson [1998: 570] は、小切手貨幣の多元的創造という表題のもと、非常に細かくこのメカニズムを分析した。中央銀行によって設定される、最低準備金を超えるあらゆる銀行預金は、このように貨幣創造の過程にかかわっている。銀行によって仲介される債権者・債務者・関係の反復した連結を通じて、さらに小切手貨幣は——うまくいけば——創造される⁽¹⁵⁾。債務関係の第一の形態は、支払いに関わるすべての人間の貨幣経済への包摂を記述する。経済システムの中心、半周辺、周辺内部におけるいかなる支払いの特徴も架空で匿名の債権者・債務者・関係にもとづいている。この

過程に関わる個人の実際の信用度は、ここでは問題にならない。第二の形態は、二次的債務にかかわるもので、これが最初の場所では決して終わらない債権者・債務者・関係の過程を引き起こす。貨幣メディアによって非人格化された債権者・債務者・関係の、個人的な信用度の証明を必要とする再人格化を通じて、人格は貨幣経済の中心に包摂される。

これら貨幣関連の洞察は、ほとんど社会学では考慮されてこなかった⁽¹⁶⁾。しかしこの包摂が本質的に貨幣メディアにもとづくならば、経済システムの中心への包摂の問題にとって大きな重要性を持つ。信用による貨幣創造が経済システムの中心にあるのであれば、この中心への包摂は信用能力を基礎とした支払能力の創出の特定の形態によって行われる。このように貨幣経済の中心への包摂は、破産後の新しい支払能力を作り出す、支払能力の創出という形態をとる。この過程は時間を必要とすることがしばしば注目されている。信用関係は常に制限時間内で行われる。しかしこれは大部分、信用力、支払能力、金利リスクの考慮をとまなう銀行間取引内部の視点におかれる⁽¹⁷⁾。けれども、大部分無視されている社会的次元も、貨幣メディアと貨幣創造の論理をとまなう経済の中心への包摂に同様の重要性を持つ。つまり債務者に関する選択の自由と債務者変更の可能性の自由。したがって完全に貨幣化された経済の中心への包摂が信用能力にもとづくならば、周辺と半周辺内部の包摂の様態を中心から区別するのは正にこの貨幣創造の過程への包摂ということになる。貨幣経済への包摂は金融財産の量では評価され得ず、債権者・債務者・関係のみで評価できる。従業員に自社株を分配する組織への加入〔入社〕は、信用能力によって中心に包摂するための重要な担保であるという事実によって、中心と半周辺の不可逆的な結合は例証される⁽¹⁸⁾。

このように、経済システムの中心から排除は、支払不能にあるのではなく、支払不能から生じる支払い能力創出可能性からの排除にある。新興諸国における薬剤師の信用の一時的停止のように、クレジットカードの非所持は、このような排除の一例である。包摂の側では、ネイティブアメリカンの例が思い浮かぶ。彼らは、自給自足経済から返済を義務づけられた政府貸付金による補助金農業に転換することで、破産の危険を冒すのだ。最後に、我々は現在、排除あるいは一時的な包摂的排除へとつながる無数の銀行破産を目撃している。後者は、債務が公有化され、実際の債権・債務関係が中断される生活保護政策の強化された一形態である⁽¹⁹⁾。更に、我々は、経済的にむしろ収益の上がる、マイクロクレジットの制度化の世界的な増加による、経済システムの中心への包摂の新しい波を見ている。

(3) 信用の諸形態

信用の諸形態は、多面的な方法で包摂し、排除する。その歴史的形成は、信用方式の現在の異質性を説明する、非常に異なる動機にまで遡ることができる。貨幣の構造化原理が、正に人々の間で同等なトレードオフ関係や契約上の義務の意味で、相互性の展望を与えないという特色にある一方で、信用は、貨幣を用いたコミュニケーション内部での自由度を再人格化する。一般化されたコミュニケーションメディアとしての貨幣が、価格を有する全ての物に適用可能であるのに対し、信用は、信用供与を決定する際に、特殊性を再導入する。信用は、一人格の他人格への義務によって成立し、その際には銀行、保険会社、会社組織のような法人であるか自然人であるかを問わない。信用は、合計額、ローンの期間、利子条件を指定し、債権者と債務者との関係を確立する〔Carruthers 2005; Mennicken 2000〕。したがって、貨幣メディアの普遍主義は、信用という方式において再特殊化され、

関係者に対する無関心という「貨幣の」特徴は、再人格化される。信用形態は債務の形態である。それは人格に向けられた支払期待を確立し、少なくとも法的制裁によって形式的に強制する。しかし、譲渡可能性を獲得すればするほど、信用はますます貨幣に似てくるという傾向をもつ⁽²⁰⁾。

一見すると信用度による経済システムへの包摂は、形式化、匿名性、そして国際性の増加というパターンに従っているように思われる。信用の初期形態はネットワークにもとづいていた。19世紀には「インサイダー貸付」、あるいは債務者の「性格」に関する調査でこの問題を処理することが試みられた。債務者の自己描写もこの通念に対応した。経済システムへの、信用度によるネットワークにもとづいた非公式の包摂は、法的社会的制裁を手段として負債を回収できるという長所があった [Lamoreaux 1994; Padgett 2007]。信用の現在の形態は、負債者の個人的資質の調査から離れ、グローバルな債務関係における不確実性の吸収を合理化するために、会計基準、恒久的な監査、開示義務、都市部の優遇などの手続きを開発してきた。数多くの金融スキャンダルや危機は、信用による貨幣創造の裏返しは、貨幣損失であることを示している。最近の例では、2007年夏にアメリカの不動産セクターから生じたサブプライムローン危機である。これらの危機は、専門家の評価の連続的スタックは、転覆や誤った解釈から保護しないという事実の証拠も与える——特に、彼らがしばしば「undoing calculation」の原則に従って作動していることを社会学的研究が示すように [Kalthoff 2007] ⁽²¹⁾。

包摂のための信用の重要性を詳細に分析すれば、信用システムが二局構造を維持していることが示される。信用システムの初期の形式は、今日でも有効な、宗教的、慈善的、博愛的目的を追求する信用委託という二次形式をすでに確立した。ルネサンス期モンテ・ディ・ピエタなどの機関が、高利貸しから貧困層を保護することにかかわり、——信用の悪魔——高利貸しは信用システムの亀裂で栄えた。慈善団体・博愛団体はすぐに続いた。彼らは貧しい人々への融資によって所得創造に寄与し、貧困層を所得による経済に新たに包摂した⁽²²⁾。この伝統はバングラデシュ農村部にあるグラミン銀行によるマイクロクレジット賦与において継続している。これがネットワークとグループにもとづいた初期の信用組織の信用実践を取り上げ、修正するグローバルな包摂の波の原因となっていることは興味深い⁽²³⁾。

そのため、経済システムへの包摂と排除の信用システムの意義——その発生を含め——は、支払能力とは別のチャンネルで破産を生み出す経済システムの二重のサイクルに還元することはできない。金融ケインズ主義の観察は、焦点を資産から貨幣創造が行われる場である負債へと移したが、やはり十分ではない。信用は経済的場の中心におけるプレーヤーとしての参加者を、選択、責任、説明責任の能力の帰属を通じて人格としての個人と法人格を包摂と排除によって選り出す。

註

(1) MacKenzie 2006; Callon and Muniesa 2005; Callon, Milla and Muniesa 2007; Knorr-Cetina and Preda 2005, Knorr-Cetina and Bruegger 2002 を見よ。

(2) 意味次元という概念を、私はルーマン [1995a: 74] の意味で用いる。「我々は『意味』という抽象概念の分解を解明しなければならない。これは意味次元という概念を補助として行われる。これによって、我々は主体概念も放棄できる。このことで事象次元の優位という事態に戻るわけではない。後者

は、これに対立する主体によって廃棄されるのではなく、我々が事象上の指示を単にいくつかの意味次元の一つとみることによって廃棄されるのである。この指示は、何らかの主体に対置されるのではないが、意味が十分に複雑ならば、それらは時間次元の意味と社会次元の意味の指示と複雑な相互依存に合致しなければならない」。

- (3) 中世については、Wood 2002、特に第3章を参照。現代における「価格のつけられない」性質の価格評価の交渉については、Fourcade 2011を見よ。
- (4) エリート大学についての米国の研究の中には、貨幣と才能の非常に限定された転換可能性と補償可能性の経験的証拠を提供するものもある。「メリット」概念に関するゼマンティック上のシフトとエリート大学への包摂を扱った研究としては、Karabel [2006]を見よ。
- (5) リベラリズムは所有問題の政治的解決を国家の中に見ている。Locke [1680] 2008, 350-351を参照。「それ故、人びとがコモンウェルスに結合する、偉大で主要な目的は、自らを政府の下に置き、その財産を保護することである」。
- (6) Goldfinger [2000: 72; cf. 2002]はこの発展を「有形経済から無形経済へのシフト」とみなしている。全貨幣取引中、財取引をとまなう割合は現在5%と見積もられている。Bryan and Rafferty 2007を見よ。彼らは経済の非物質化の増大の貨幣概念にとっての意味を論じているが、説得力ある結論には至っていない。Hilferdingerは同様の発展を記述するために「金融市場資本主義」という概念を創りだした。金融の社会学という研究分野もこの種類の金融実践に関心を持っている。もっとも最近の研究では、貨幣のバーチャル化を論じているMacKenzie 2009を参照せよ。
- (7) この関係を実体化する研究は、教育システム [Bourdieu et al. 1999] についてのものと米国におけるゲットーの貧困の空間的分離 [Wilson 1996] についてのものは、すでに存在している。
- (8) 排除の可逆性については、Bohn 2009を参照。
- (9) Beckert [2008: chap. 3] は、相続慣行における変化も包摂と排除の社会的運動を反映し、変化させることを示すことができる。
- (10) このテーゼも例えば、最小準備高という条件を満たすならば、民間クレジット会社を銀行と同格としようとする目下の欧州中銀の考慮によって、現実化される。同じことは、英国の経済実務家が現在、中央銀行が本来的に破産の危機があるのかと議論している事実にもいえる。同時に、最近の倒産の分析によって異議を唱えられている。Mihm and Roubini [2010]を見よ。
- (11) Hahn [2008] は、後期ルーマンの著作におけるサブシステム自体の分析で中心・周辺の区別の重要性が増大したことを指摘している。初期の著作ではこの区別は、前近代社会を全体として特徴付ける点でのみ用いられた。
- (12) Schumpeter [[1929] 2008: 218] は、貨幣の本質についての考察で、すでに、「商品の実体の変化とこの観点からの無意味さに何の注意も払わない[貨幣の]自律性」を指摘していた。それ故彼は、計算の単位は、厳密に言えば、財貨の価値といかなる連合からも独立している、と結論した。
- (13) 19世紀から、消費は女性的な含意をもった。証拠はZola [1883]に見られる。このテーゼの、ドイツの現在に触れた経験的実体化はBurzan et al. [2008: 63-70]に見られる。私の議論の文脈では、19世紀のゼマンティックが金融投機の実践の発生を中心に限定し、それ故周辺（女性的消費）における誘惑の抑制を目標としていることが興味深い。Stäheli [2007: 265-301]を参照。
- (14) Simmel [[1900] 1989: 375-482, passim] が主に念頭においていたものは、個人の自由獲得の文化理論的意味において社会的次元にあった。
- (15) この過程は、遊休資金と過剰準備に関する銀行の関心によって維持される。
- (16) Parsons [1971: 26] は、この最近の経済学の洞察をすでに考慮に入れており、それを権力メディアに関するゼロサム定理の反論に用いた。けれども、彼はこれを包摂の問題に関連づけなかった。それ故、パーソンズは「同じドルが、二重の役割を果たす。所有権を保持する預金者の資産として扱われ、あたかも自分のものであるように貸付権を有する銀行によっても扱われ」、未払いの貸付金により創造された新しい銀行預金の貨幣量で測定すれば、いずれの場合も流通するメディアに対応した純加算が存在する。
- (17) Wolfgang Stützgen [1983b: 33] は、銀行間取引において流動性のリスクを取り扱う戦略は、支払い能

力のチェックから資産の信用付与可能性まで変動しうると断定している。貸付と借入れの時間制限が、そのようなリスクを扱うキーなのではなく、銀行間取引における銀行相互の信用性がそれなのである。現在の経済危機が好例である。

- (18) Ingham [2004a: chap. 6-7, 150; 2004b] は、経済における信用可能性の重要性の増大から次の結論を引き出した。すなわち、経済の根本的な分裂は、もはや貧困と富、あるいは生産関係内部に見られるのではなく、むしろ債務者と債権者の間に見られるのである、と。
- (19) リーマン・ブラザーズが真の排除の事例を構成するのに対し、破産からの支払い能力の生成可能性に基準を見るならば、AIG、Fanny Mae、Freddie Mac は包摂的排除の例である。
- (20) 信用システムの詳細な分析は、この点で決定的な出来事が17世紀に生じ、20世紀末に繰り返されたことを示すだろう。アメリカの観点からは Carruthers and Ariovich [2010: chap. 4 and 5] ; Carruthers [2010] を見よ。
- (21) 会計検査への新しい信仰については、Power [1997] を見よ。社会的排除と信用不可能性、赤線の実施による都市の（空間的）分離については Aalbers [2005] を見よ。信用消費の選択とマネージメントを目的とした「スコアカード」の計算道具については、Poon [2007] を見よ。ギリシャ政府債務の評価事例への計算上の展望の応用については Wansleben [2011] を見よ。
- (22) 19世紀に設立された貯蓄銀行の多くは債権者の利益に定位していたのではなく、債務者の保護に定位していたことはよく知られている。Woolcock [1999] は、（アイルランド、バングラデッシュなど）都市と農村における過去と現在のマイクロ信用会社の成功と失敗を分析している。
- (23) 概観については、Sengupta and Aubuchon [2008] 参照。もう一つの興味深い事実は、95%という債務者に占める女性の高い比率である。よりマイクロ経済学と社会学に定位した研究はグループに立脚した信用制度の現象とその成功・失敗例の評価に特別の焦点を当てている [Woolcock 1999; Anthony 2005]。世界経済への意義をもった包摂の問題は、あったとしてもまれに「貧困との闘い」という綱領的なフレーズで反省されるに過ぎない [cf. Yunus 2007]。

文献

- Aalbers, M.B. 2005 "Place-based Social Exclusion: Redlining in the Netherlands," *Area* 37(1): 100-109.
- Anthony, D. 2005 "Cooperation in Microcredit Borrowing Groups: Identity, Sanctions, and Reciprocity in the Production of Collective Goods," *American Sociological Review* 70: 496-515.
- Appleby, J.O. 1976 "Theology and Theory: The Tension between Political and Economical Liberalism in Seventeenth-Century England," *American Historical Review* 81: 499-515.
- Appleby, J.O. 1978 *Economic Thought and Ideology in Seventeenth-Century England*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Baker, W.E. 1992 "What Is Money?" Mizruchi, M.S. & Schwartz, M. (eds.) *Incorporate Relations*, Cambridge University Press, pp. 109-144.
- Beckert, J. 2003 "Economic Sociology and Embeddedness: How shall we Conceptualize Economic Action?," *Journal of Economic Issues* 37: 769-787.
- Beckert, J. 2006 "Interpenetration Versus Embeddedness: The Premature Dismissal of Talcott Parsons in the New Economic Sociology," *American Journal of Economics and Sociology* 65: 161-188.
- Beckert, J. 2008 *Inherited Wealth*. Princeton, Princeton University Press.
- Bloch, M. [1936] 1954 *Esquisse d'une histoire monétaire de l'Europe*. Armand Colin.
- Bohn, C. 2006a "Une société mondiale. Les concepts sociaux de Bourdieu et Luhmann," Müller, H.P. & Sintomer, Y. (eds.) *Pierre Bourdieu, théorie et pratique. Perspectives franco-allemandes*, La Découverte, pp. 101-127.
- Bohn, C. 2006b *Inklusion, Exklusion und die Person*. UVK.
- Bohn, C. 2009 "Inclusion and Exclusion: Theories and Findings," Gestrich, A. & Raphael, L. (eds.) *Inclusion/Exclusion: Strangers and Poor People from the Classical Antiquity to the Present Days*, Lang, pp. 35-53.

- Boltanski, L. & Chiapello, E. 2007 *The New Spirit of Capitalism*. Verso. 三浦直希・海老塚明・川野英二・白鳥義彦・須田文明・立見淳哉 (訳) 『資本主義の新たな精神』上・下 ナカニシヤ出版 2013.
- Bourdieu, P. et al. 1999 *The Weight of the World: Social Suffering in Contemporary Society*. Stanford University Press.
- Bryan, D. & Rafferty, M. 2007 "Financial Derivatives and the Theory of Money," *Economy and Society* 36: 134-158.
- Burzan, N., Lökenhoff, B., Schimank, U. & Schöneck, N. 2008 *Das Publikum der Gesellschaft: Inklusionsverhältnisse und Inklusionsprofile in Deutschland*. VS Verlag.
- Callon, M. & Muniesa, F. 2005 "Economic Markets as Calculative Collective Devices," *Organization Studies* 26: 1229-1250.
- Callon, M., Millo, Y. & Muniesa, F. (eds.) 2007 *Market Devices. The Sociological Review*. Basil Blackwell.
- Carruthers, B.G. 1996 *City of Capital: Politics and Markets in the English Financial Revolution*. Princeton University Press.
- Carruthers, B.G. 2005 "The Sociology of Money and Credit," Smelser, N.J. & Swedberg, R. (eds.) *The Handbook of Economic Sociology*, 2nd ed. Princeton University Press, pp. 355-378.
- Carruthers, B.G. 2010 "The Meaning of Money: A sociological Perspective," *Theoretical Inquiries in Law* 11: 51-74.
- Carruthers, B.G. & Ariovich, L. 2004 "The Sociology of Property Rights," *Annual Review of Sociology* 30: 23-46.
- Carruthers, B.G. 2010 *Money and Credit: A Sociological Approach*. Polity Press.
- Castel, R. 1995 "Les pièges de l'exclusion," *Lien social et politique—RIAC* 34: 13-21.
- Fourcade, M. 2011 "Cents and Sensibility: Economic Value and the Nature of 'Nature,'" *American Journal of Sociology* 116(6): 1721-1777.
- Goldfinger, Ch. 2000 "Intangible Economy and Financial Markets," *Communications & Strategies* 40: 59-89.
- Goldfinger, Ch. 2002 "Intangible Economy and Electronic Money," The Organisation for Economic Co-Operation and Development (ed.) *The Future of Money*, OECD Publications, pp. 87-122.
- Granovetter, M. 1974 *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers*. Harvard University Press.
- Granovetter, M. 1983 "The Strength of Weak Ties: A Network Theory Revisited," *Sociological Theory* 1: 203-233.
- Hahn, A. 1987 "Soziologische Aspekte der Knappheit," Heinemann, K. (ed.) *Soziologie des wirtschaftlichen Handelns*, Westdeutscher Verlag (Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 28), pp. 119-132.
- Hahn, A. 2008 "Zentrum und Peripherie," *Erleben, Erleiden, Erfahren: Die Konstitution sozialen Sinns jenseits instrumenteller Vernunft*, Junge, K., Suber, D. & Gerber, G. (ed.) transcript, pp. 411-433.
- Heinsohn, G. & Steiger, O. 2006 *Eigentumsökonomik*. Metropolis-Verlag.
- Heintz, B., Münch, R. & Tyrell, H. (eds.) 2005 *Weltgesellschaft—Theoretische Zugänge und empirische Problemlagen*. Lucius & Lucius (Sonderheft der Zeitschrift für Soziologie).
- Hutter, M. 1993 "The Emergence of Bank Notes in 17th Century England: A Case Study of a Communication Theory of Economic Change," *Sociologia Internationalis* 31: 23-41.
- Hutter, M. 1999 "Wie der Überfluss flüssig wurde: Zur Geschichte und zur Zukunft der knappen Ressourcen," *Soziale Systeme* 5: 41-54.
- Ingham, G. 2004a *The Nature of Money*. Polity Press.
- Ingham, G. 2004b "The Emergence of Capitalist Credit Money," Wray, R. (ed.) *Credit and State Theories of Money: The Contribution of A. Mitchell Innes*, Edward Elgar, pp. 173-223.
- Kalthoff, H. 2000 "The Inventory of Firms: How Banks Analyze Risk in Central Europe," Kalthoff, H., Rottenburg, R. & Wagner, H.J. (eds.) *Ökonomie und Gesellschaft. Facts and Figures. Economic*

- Representations and Practices, Jahrbuch* 16, Metropolis, pp. 59–87.
- Karabel, J. 2006 *The Chosen. The Hidden History of Admission and Exclusion at Harvard, Yale and Princeton*. Houghton Mifflin Company.
- Keynes, J.M. 1936 *The General Theory of Employment, Interest and Money*. Macmillan. 間宮陽介 (訳)『雇用, 利子および貨幣の一般理論』上・下 岩波書店 [2008] 2012.
- Knorr-Cetina, K. & Bruegger, U. 2002 “Global Microstructures: The Virtual Societies of Financial Markets,” *American Journal of Sociology* 107: 905–950.
- Knorr-Cetina, K. & Preda, A. (eds.) 2005 *The Sociology of Financial Markets*. Oxford University Press.
- Lamoreaux, N. 1994 *Insider Lending: Banks, Personal Connection and Economic Development in New England*. Cambridge University Press.
- Locke, J. [1680] 2008 *Two Treatises of Government*. Cambridge University Press. 加藤 節 (訳)『完訳 統治二論』 岩波書店 2010.
- Luhmann, N. 1982 “The World Society as a Social System,” *International Journal of General Systems* 8: 131–138.
- Luhmann, N. 1988 *Die Wirtschaft der Gesellschaft*. Suhrkamp. 春日淳一 (訳)『社会の経済』 文真堂 1991.
- Luhmann, N. 1989 “Am Anfang war kein Unrecht,” *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, vol. 3. Suhrkamp, pp. 11–64. 高橋 徹・赤堀三郎・阿南衆大・徳安 彰・福井康太・三谷武司 (訳)『社会構造とゼマンティック』3 法政大学出版局2013 pp. 1–52.
- Luhmann, N. 1995a *Social Systems*. Stanford University Press. 佐藤 勉 (監訳)『社会システム理論』上・下 恒星社厚生閣 1993, 1995.
- Luhmann, N. 1995b “Inklusion und Exklusion,” *Soziologische Aufklärung*, vol. 6. Westdeutscher Verlag, pp. 237–265.
- Luhmann, N. 1997 *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 2 vols. Suhrkamp. 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原 謙・高橋 徹 (訳)『社会の社会』上・下 法政大学出版局 2009.
- Luhmann, N. 2004 *Law as a Social System*. Oxford University Press.
- MacKenzie, D. 2009 “Derivatives: The Production of Virtuality,” *Material Markets*, Oxford University Press, pp. 63–84.
- MacKenzie, D. 2006 *An Engine, Not a Camera: How Financial Models Shape Markets*. MIT Press.
- Mennicken, A. 2000 “Figuring Trust: The Social Organization of Credit Relations,” Kalthoff, H. Rottenburg, R. & Wagner, H.J. (eds.) *Ökonomie und Gesellschaft. Facts and Figures. Economic Representations and Practices, Jahrbuch* 16, Metropolis, pp. 35–58.
- Mihm, S. & Roubini, N. 2010 *Das Ende der Weltwirtschaft und ihre Zukunft: Crisis Economics*. Campus.
- Padgett, J.F. & McLean, P.D. 2011 “Economic Credit in Renaissance Florence,” *The Journal of Modern History* 83(1):1–47.
- Parsons, T. [1963] 1969 “On the Concept of Political Power,” Parsons, T. (ed.) *Politics and Social Structure*, Free Press, pp. 352–404. 新明正道 (監訳)『政治と社会構造』下 誠信書房 1973 第14章.
- Parsons, T. [1965] 1976 “Full Citizenship for the Negro American?” Parsons, T. (ed.) *Sociological Theory and Modern Society*, Free Press, pp. 422–465. 新明正道 (監訳)『政治と社会構造』上 誠信書房 1973 第11章.
- Parsons, T. 1971 *The System of Modern Societies*. Prentice-Hall. 井門富二夫 (訳)『近代社会の体系』至誠堂 1977.
- Pichler, J.W. 1983 *Necessitas: Ein Element des mittelalterlichen und neuzeitlichen Rechts*. Duncker & Humblot.
- Pocock, J.-G.A. 1979 “The Mobility of Property and the Rise of Eighteenth-Century Sociology,” Parel, A. & Flanagan, Th. (eds.) *Theories of Property: Aristotle to the Present*, Waterloo, pp. 141–166.
- Poon, M. 2007 “Scorecards as Devices for Consumer Credit: The Case of Fair, Isaac & Company Incorporated,” Callon, M., Millo, Y. & Muniesa, F. (eds.) *Market Devices*, Basil Blackwell (Sociological

- Review Monographs), pp. 284–307.
- Power, M. 1997 *The Audit Society: Rituals of Verification*. Oxford University Press.
- Riese, H. 1998 “Geld: das letzte Rätsel der Nationalökonomie,” Schelkle, W. & Nitsch, M. (eds.) *Rätsel Geld*, 2nd ed. Metropolis, pp. 45–63.
- Samuelson, P.A. & Nordhaus, W.D. 1998 *Economics*, 16th ed. McGraw-Hill Book Company. 都留重人 (訳) 『サムエルソン経済学』上・下 岩波書店 1992, 1993.
- Schumpeter, J.A. [1929] 2008 *Das Wesen des Geldes*. Vandenhoeck & Ruprecht.
- Sengupta, R. & Aubuchon, C.P. 2008 “The Microfinance Revolution: An Overview,” *Federal Reserve Bank of St. Louis Review* 90: 9–30.
- Simmel, G. [1900] 1989 *Philosophie des Geldes*. Suhrkamp. 居安正 (訳) 『貨幣の哲学』新訳版 白水社 1999.
- Stäheli, U. 2007 *Spektakuläre Spekulation. Das Populäre der Ökonomie*. Suhrkamp.
- Stützel, W. 1975 *Über unsere Währungsverfassung*. Mohr Siebeck (Walter Eucken Institut, Vorträge und Aufsätze, vol. 56).
- Stützel, W. 1983a *Bankpolitik heute und morgen: Ein Gutachten*, 3. ed. Fritz Knapp.
- Stützel, W. 1983b *Über unsere Währungsverhältnisse. Zehn Jahre Floating: Verheißung und Erfahrung*. Mohr Siebeck (Walter Eucken Institut, Vorträge und Aufsätze, vol. 91).
- Swedberg, R. 2004 “What Has Been Accomplished in New Economic Sociology and Where Is It Heading?” *Archives Européennes de Sociologie* 45: 317–330.
- Wallerstein, I. 1974 *The Modern World-System I: Studies in Social Discontinuity*. Academic Press. 川北 稔 (訳) 『近代世界システム』1 名古屋大学出版会 2013.
- Wallerstein, I. 1979 *The Capitalist World-Economy*. Cambridge University Press. 川北 稔 (訳) 『近代世界システム』2 名古屋大学出版会 2013.
- Wansleben, L. 2011 “Wie wird bewertbar, ob ein Staat zu viele Schulden hat? Finanzexperten und ihr Bewertungswissen in der griechischen Schuldenkrise,” *Berliner Journal für Soziologie* 21: 495–519.
- White, H.C. 1981 “Where Do Markets Come from?” *American Journal of Sociology* 87: 517–547.
- Wilson, W.J. 1996 *When Work Disappears: The World of the New Urban Poor*. Knopf.
- Windolf, P. 2005 “Was ist Finanzmarktkapitalismus?” Windolf, P. (ed.) *Finanzmarktkapitalismus: Analysen zum Wandel von Produktionsregimen*, VS Verlag (Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 45), pp. 21–84.
- Wood, D. 2002 *Medieval Economic Thought*. Cambridge University Press.
- Woolcock, M.-J.V. 1999 “Learning from Failures in Microfinance: What Unsuccessful Cases Tell Us about How Group-Based Programs Work,” *American Journal of Economics & Sociology* 58: 17–42.
- Yunus, M. 2007 “Credit for the Poor,” *Harvard International Review* 29: 20–24.
- Zelizer, V.A. 1993 “Making Multiple Moneys,” Swedberg, R. (ed.) *Explorations in Economic Sociology*, Russel Sage, pp. 193–212.
- Zelizer, V.A. 1997 *The Social Meaning of Money: Pin Money, Paychecks, Poor Relief, and Other Currencies*. Princeton University Press.
- Zola, E. 1883 *Au Bonheur des dames*. G. Charpentier.

(Prof. Dr. Cornelia Bohn, Universität Luzern, Kultur- und sozialwissenschaftliche
Fakultät, Soziologisches Seminar, PF 4466 6002 Luzern Switzerland,
cornelia.bohn@unilu.ch)

(Priv.-Doz. Dr. Takemitsu Morikawa, Universität Luzern, Kultur- und
sozialwissenschaftliche Fakultät, Soziologisches Seminar, PF 4466 6002 Luzern,
Switzerland, takemitsu.morikawa@doz.unilu.ch)